

## 言葉の気配り

「言葉の気配り」という標題からまず思い浮かぶのは、単語や言い回しなどをどう選ぶのがいいだろうという気配りだと思います。

例えば、「ありがとう」「すみません」「お世話様でした」のどれがいいだろう、「〜してくださる」か「〜していただく」か、どちらの敬語がいいのだろう、手紙のあて名に付ける敬称は「様・殿・先生」のどれにしようか、などのような言葉選びの気配りです。

たしかに、相手やその場にぴったり合った的確な言葉を選ぶことは、毎日の暮らしの中では欠かせない言葉の気配りです。

しかしながら、毎日の言葉を振り返ってみると、言葉の気配りがこうした言葉そのものの選び方だけに向けられているのではないことに気づきます。このことに気づかせてくれるのが、次のような言葉です。

- ①「どのようにお礼を申し上げてよいやら、お礼の言葉ありません。……」
- ②「こんな時に、このような場所で申し上げてよいか分かりませんが……」
- ③「私などから課長に直接お伝えするのが適切かどうか、迷うのですが……」

④「お電話で申し上げるようなことではないのかもしれませんが……」

⑤「直接お目にかかって申し上げるのが本当ですが、お手紙で失礼いたします。……」

これらは、実際に口に出して言ったり文字に書いたりする具体的な言語表現です。そして、端的に言えば、相手への伝え方、コミュニケーションのとり方についての自分自身の迷いやとまどいを、そのまま表現しています。

①「どのように申し上げてよいか」は、言葉や言い回しそのものについての迷いです。前に挙げた言葉選びはこの迷いの仲間です。

②「こんな時に、こんな場所で」という迷いは、コミュニケーションの時間や場所についての気配りです。

③「私などから課長に直接伝えるのが適切か」という迷いは、話し手や伝える相手の選び方についての気配りです。

④「お電話で申し上げるべきでないかもしれない」という迷いや、⑤「直接お目にかかって申し上げるのが本当」「お手紙で失礼」という気配りは、用事を伝えるために用いる道具や媒体の選び方についてのものです。

わずかな例しか挙げられませんが、私たちが言葉そのものの選び方のほかにも、その言葉の伝え方やコミュニケーションのとり方についても、実に様々な気配りをして、迷ったりとまどったりしていることがわかります。

上の例で表現されている気配りは、相手に対する話し手の敬意やへりくだりの気持ち、丁寧で改まった気持ちなどを適切に表現してコミュニケーションを行おうとする上での気配りだと言えます。

このほかにも、ことがらを正確に分かりやすく伝えようとする気配りも私たちは様々なにしています。例えば「抽象的な話だけでは足りませんので、ここからは具体的な実例を挙げて御説明します」「説明の順序があとさきになり失礼しました」などは、話の内容やその組み立て方・順序についての気配りが現れた言語表現でしょう。

ひとつくちに「言葉の気配り」と言っても、以上のように様々なものごとについて様々な内容の気配りを私たちはしています。

こうした気配りの在りかや内容を気づかせてくれる手がかりが、ここで挙げた例のように、ほかならぬ私たち自身が言ったり書いたりしている具体的な言葉の中に数多くあります。ふだんの暮らしの中で、そうした言葉にも耳や目を向けたいものです。

(国立国語研究所長 杉戸清樹)

# 手紙の文章

手紙文は、極めて定型化した文章であり、書式や用語などに関して書簡作法と呼ばれる決まり事が幾つもあります。

## 頭語と結語との対応関係

手紙文における決まり事と言ったときに、まず思い浮かぶのは頭語と結語との対応関係でしょう。一般的に頭語「拝啓」に対しては結語「敬具」を使い、頭語「前略」に対しては結語「草々」を使うとされています。こうした頭語と結語との対応関係が、いつごろから規範となったのかということについては、現在のところ十分明らかにされているとは言えない状況にあります。

## 「拝啓」「敬具」の歴史

現在最も一般的な頭語・結語である「拝啓」「敬具」は、共に江戸時代後期から用例が見られますが、広く使われるようになったのは、明治後期以降のことです。『日本国語大辞典』第二版（小学館）の「敬具」の項を見ると、次のような『吾輩は猫である』での用例が載っています。

拝啓 愈御多祥奉賀候（略）

只管希望の至に堪へず候 敬具

この例を見ると、明治後期には既に「拝啓」「敬具」が広まるとともに、その対応関係も一般的になっていったような印象を受けます。

しかし漱石の手紙を見ると、「拝啓」で始まっているにもかかわらず「勿々」で終わっている手紙がありますし、そもそも頭語が書かれていても結語が書かれていないとか、その反対に頭語はなく結語だけ書かれているという手紙も見受けられます。頭語・結語の対応関係という以前に、頭語・結語を書くということ自体、規範として余り強く意識されていなかったように見受けられます。

また明治三〇年から四五年の間に刊行された手紙の文例集・一七種を調査したところ、三五六例ある「拝啓」のうち、「敬具」と対応していたのはわずか二九例でした。こうしたことから、明治時代には「拝啓」で始めて「敬具」で終わるといった規範は、いまだ確立していなかったと考えられます。

## 「拝啓—敬具」の対応はいつから？

それでは、一体いつごろから「拝啓—敬具」という対応が手紙文の規範となったのでしょうか

うか。これについては、まだ調査が十分ではなく、明確なことを言える段階ではありませんが、一つの見通しとしては、次のようなことが言えます。

昭和一〇年刊行の『実用通信文精義』という手紙文例集を見ると、「普通一般的な場合」に用いる頭語・結語として「拝啓」「敬具」を挙げ、手紙文では頭語・結語の丁寧の度合いを一致させることが必要であるとして、次のような表を載せて頭語・結語の正しい対応関係を示しています。

(正しい用法)	(誤れる用法)
謹啓—謹言	謹啓—敬具
拝啓—敬具	拝啓—勿々
前略—勿々	前略—謹言

このようなことから、昭和初期には「拝啓—敬具」という対応が一つの規範として意識されるようになっていたものと思われる。

なお、右の表には、「拝啓—敬具」以外にも「謹啓—謹言」「前略—勿々（今日では「草々」）」という対応関係が正しい用法として示されています。これらの対応関係は、今日でも規範として意識されているものです。

昭和初期は、手紙文の歴史の中で、頭語・結語に関する作法が整ってきた時期として位置付けることができそうです。

（研究開発部門第一領域研究員 小椋秀樹）

# 表現法の地域差

## 朝のあいさつの表現

### 日本各地の朝のあいさつ

朝のあいさつというと、共通語では「おはよう」または「おはようございます」が最も一般的でしょう。一方地域によつては、それぞれの土地の言葉によるあいさつも交わされています。

#### ① 福井県武生市下中津原町

- A…Bツツアーン オハヨーゴジエンス。
- B…アツ オハヨーゴジエンス。

#### ② 群馬県利根郡利根村

- A…ハー(「もう」) 起キタカイ。
  - B…ハイヨ。ハイムシ(「早いね」)Bサン。
  - A…アー ハイカッタムシ(「早かったよ」)。
- (国立国語研究所編『方言談話資料』より)

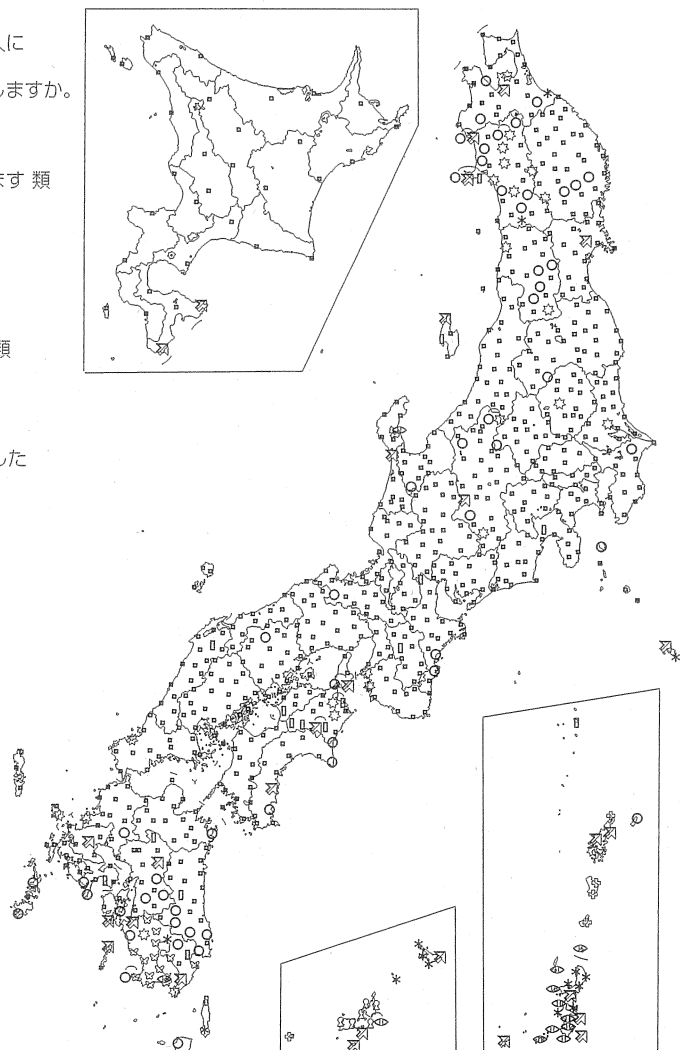
### 「おはよう」と言わない方言

①の「オハヨーゴジエンス」は、「おはよう」に丁寧形式が付加した表現です。その点では「おはようございます」と同じです。

一方②には、「おはよう」にあたるようなひと言の決まり文句の表現が見当たりません。ちよつとした言葉を掛け合うこと全体が、あいさつになっていると見る事ができます。

### 定型性の低い表現は周辺部に

二つのタイプのあいさつ表現は、どのような関係にあるのでしょうか。国立国語研究所編『方言文法全国地図』からご覧ください。



#### おはようございます

質問文：  
朝、近所の目上の人に  
道で出会ったとき、  
どんなあいさつをしますか。

- おはようございます類  
オハヨーガンス・  
オハヨーアリマス  
などを含む
- 早いね類
- ☆ いい天気だ類
- ✂ どこへ行くのか類
- ⊕ 起きたか類
- ▮ こんにちは
- ▽ 今日はまだごわした
- ◇ うがめら (=拜む)
- ⊖ くよーなーら
- \* その他

国立国語研究所編『方言文法全国地図 第6集』より略図を作成

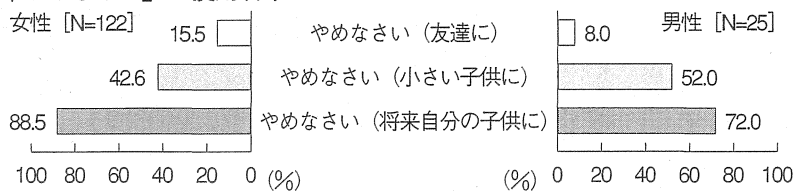
「早いね」「いい天気だ」「起きたか」など、②のような定型性の低いタイプと見られる表現が、中央部から離れた周辺地域にまとまっています。周辺地域に古い言い方が残るといふ、方言分布の解釈の原則に沿って見ると、これらは、全国に広がる「おはようございます」類よりも、古い特徴を示している可能性がありそうです。

(研究開発部門第二領域主任研究員 三井はるみ)

## 年齢と言葉

私たちが使う日本語は一樣ではありません。同じことを言う場合でも、地域による違い、性別による違い、年齢による違いなどがあります。国立国語研究所では、こうした話し言葉における多様性を把握するための調査研究も行っています。

「やめなさい」の使用率



今回は、年齢による違いについて、どのようなタイプがあるか考えてみましょう。

年齢による違いとしてまず意識されるのは若者言葉や新語ではないでしょうか。こうした言葉は、どちらかと言うと若年齢で使用が始まる傾向が強く、逆に上の年齢層ではあまり使わなかったり従来の言い方をするため、言葉に年齢差が生じるのです。

たとえば袖無しの上着のことを従来は「チョッキ」と言っていました。若い世代を中心に「ベス

ト」という言い方が一般化したため、「チョッキ」は上の世代、「ベスト」は下の世代という年齢差が生じています。つまり、世の中の言葉の変化が年齢差として現われているわけです。しかし年齢差には、このほかに、個人の年齢が上がることで生じるものもありそうです。

全ての男性が使うというわけではありませんが、若い頃は使わなくても中高年に達してから使い始める言葉があります。「暑いですなあ」とか「よく降りましたなあ」のような、丁寧語の下に「なあ」をつける表現などがそれです。

個人的な体験から気づいた同類の表現として、私たちが親になってから子供たちに対して使い始める傾向のある言葉というものもあります。

「あぶないからやめなさい」のような表現がそのひとつです。親になると相手の行為を禁止することが多くなるため使うのではないかと思われるかもしれませんが、禁止という言葉行動自体は、友達や家族に対しても行っていました。しかし、その時の言葉は「やめなさい」ではなく「やめろよ」などでした。「うなさい」は、私の場合、親になって初めて使った言葉

です。

首都圏の大学生に対し最近アンケートをしてみたところ、上の図のような結果が得られました。相手として「友達」「小さい子供」「将来の自分の子供」を想定させ、それぞれに対し「やめなさい」を使うかどうか尋ねました。数値は「使う」と回答した人の割合です。

これを見ると、「友達」に対しての使用率は男女とも一割程度にとどまるのに対し、「将来の自分の子供」に対しては、女性で約九割、男性も約七割に達しています。親になってから自分の子供に使い始める傾向の強い言葉、すなわち「親言葉」と言えそうです。このほか、「小さい子供」に対しても四〜五割の人が使うと回答しています。典型的には自分の子供に対してですが、ペットなども含め、保護される対象に広く使用される言葉なのかもしれません。

同じような傾向は、「食べてごらん」や「連れておいで」にも見られました。これらはいずれも尊敬語を含む表現です。自分の子供に尊敬語を使うということは普通は考えられませんが、これらは「ぞんざいでない丁寧な物言い」として使われていると言えそうです。子供の上に立つ親として品格を出す、親としての尊敬を示す、丁寧な言葉遣いの範を示す、などの意識が働いているのかもしれない。

(研究開発部門第二領域主任研究員 尾崎喜光)

# 会話の進め方

## 日常生活のコミュニケーション

毎日の暮らしの様々な場面で、私たちは言葉によるコミュニケーションを行い、様々な相手に様々な目的で働き掛けています。「人に何かを頼む」というのも、その一つです。

ある具体的な場面を例に考えてみましょう。行きつけの店で、かさばる買物をした後、ちょっとよそへまわるので、その荷物を預かっておいてもらおうとします。そんなとき、店の人に何と言って頼むでしょうか。

## 頼み方のいろいろ

この同じ場面でも、人によって言い方は様々です。ここでは、国立国語研究所が平成八一〇年度に仙台・東京・京都・熊本で若年・壮年・高年齢の男女合計四三二人を対象に行った調査の結果を見てみましょう。

回答の中には、頼むことだけを端的に伝える形もありました。

荷物、預かってもらえませんか？

また、次のように、呼び掛けや事情説明も

加えて頼むという人もありました。

すみません、ちょっとこれから用事あるんで、これ預かってもらえますか。

調査回答では、ほかにも次のような内容を加えるものが見られました。

- 用件の前触れ（「頼んでいいですか？」）
- 恐縮の気持ち（「すみませんけれども、」）
- 回収の請け合い（「後で取りに来ます」）
- 相手の意向の確認（「どうですか？」）
- 依頼の念押し（「お願いします」）

こうしたものの、どれをどのように組み合わせるかで、ニュアンスや印象の違いも出てくるのだと考えられます。

## 世代による言い方の違い

調査回答を調べた結果、どんな内容のことを言うかについては、若年層（高校生）か高・壮年層かという世代によって、傾向に違いがあることが分かりました。

若年層では、依頼のほかに言うのは、呼び掛けか事情説明という人が過半数を超えました。それに対して高・壮年層では、先にあげ

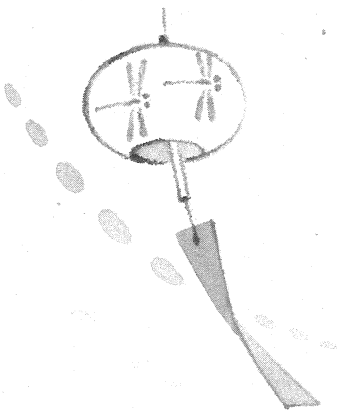
た各種の内容が回答にあらわれていました。特に、「すみませんが」と恐縮の気持ちを述べるのは、高・壮年層の方が多く見られました。

## 状況に応じたコミュニケーションを

同じ頼みをするにも、いろいろな言い方ができます。何をどう言うのがいいかは、一概に決められるものではありません。手短かに伝えるのがいいときもあれば、説明や恐縮の言葉を添える必要がある場合もあります。

お互いにとって心地よく、目的も効果的に果たせるコミュニケーションを行うには、同じ用件でも様々な言い方・伝え方があることを日ごろから心にとめて、相手や場面の状況に応じて適切な働き掛けを選んでいくことが大切なのではないでしょうか。

（研究開発部門第二領域主任研究員 熊谷智子）



# 話し言葉にみられる

## 「場つなぎ表現」

### 話し言葉を眺める

私たちは普段、多くの話し言葉に接しています。しかし、話し言葉を「聞く」ことはあっても、話し言葉をじっくりと「眺める」機会はありません。あまりに思っています。

国立国語研究所では、情報通信研究機構、東京工業大学と協力して、六六一時間に及ぶ話し言葉を録音し、話し言葉のデータベースを作成しました。その一部を少し見てみましょう。

でエッター 当日ですね アノーマ 引率  
ウーの人に連れてかれて およそ二五人  
が エー 外房線ですね 外房線に乗って  
エー 茂原に向かうわけですね

いかがでしょうか。実際に話された言葉を文字にして眺めてみると、「アノーマ」や「エッター」「エー」のような表現が、意外と多く話されていることに気付かれます。これらの表現は、言葉に詰まった時などに、「間(ま)」を埋めるために使われることが多いもので、話し言葉の特徴の一つと言えるでしょう。ここで

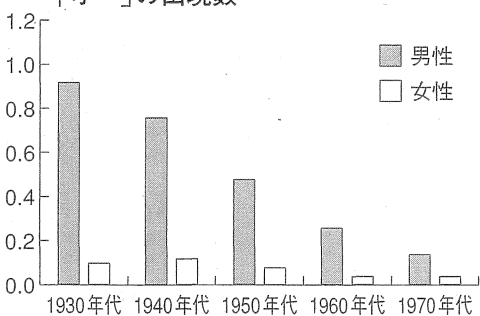
は「場つなぎ表現」と呼ぶことにします。

### 気づかれにくい場つなぎ表現

普段、意識されることの少ない場つなぎ表現ですが、話し言葉のデータベースを調べると、様々なことが分かってきました。

例えば、「授業を」オー やつてる「ウーうち」に「イー」のように、直前の語の最後の母音と同じ母音を延ばす、といった場つなぎ表現があります。「アノーマ」や「エー」などの典型的な場つなぎ表現とは異なり、「イー」「ウー」「オー」は、使っていることに全く気付かない人も多いようです。

図 男女別・生年代別に見た1分あたりの「オー」の出現数



### 男女差 年齢差

これらの場つなぎ表現の使用には、男女差、年齢差が見られます。

「オー」の使用傾向を見てみましょう。グラフから、「オー」の使用は圧倒的に男性が多く、女性はほとんど用いないこと、また男性も、若年層になる程少なくなる傾向が見てとれます。「イー」や「ウー」にも同じような傾向が見られます。意識せずに使うことの多い場つなぎ表現に、このような男女差、年齢差が見られるというのは、とても興味深いことです。

### 場つなぎ表現が多い人ほど話し下手?

場つなぎ表現が多いと、聞き手に「話し下手」という印象を与えてしまうのでは、と心配する人も多いようです。しかし調べてみると、場つなぎ表現の少ないスピーチの方が、「単調」「自信なさそう」「たどたどしい」といった比較的マイナスの印象を聞き手に与えるのに対し、ある程度多い方が、「表情豊か」「自信ありそう」「流暢」といったプラスの印象を与えている傾向が見られました。

ニュース原稿を読む時には滑らかに話すプロのアナウンサーも、司会をする場合などでは、あえて場つなぎ表現を使うこともあるそうです。場つなぎ表現を排除して淀みなく話す、このような話し方が、必ずしも表情豊かで流暢な印象を聞き手に与える、というわけではなさそうです。

(研究開発部門第二領域研究員 小磯花絵)

# 敬語の効果的な使い方

## 一 敬語を使うことによる効果

敬語を使うことによる効果は、次の四つです。

- ① 他者に敬意を表す↓尊敬語は、他者の側を高めた言い方することによって他者に敬意を表します。謙譲語は、自分の側についてへりくだった言い方することによって相対的に他者に敬意を表します。丁寧語「です」「ます」「ございます」は話し相手に敬意を表します。
- ② 相手との距離を保つ↓私たちは、相手との距離を保つために敬語を使っています。逆に、相手に近づいて、気さくに話したいときは、敬意レベルを下げたり、敬語を避けたりします。
- ③ 話し手の礼儀正しさを表す↓私たちは敬語を使って、自分が礼儀正しい人間であることを表現しています。
- ④ 話し手の教養の高さを表す↓敬語は形式を学習し、使う訓練をしないと身に付きません。難しいだけに、うまく使いこなすと教養の高さを感じさせます。

ただし、①～④の効果は、敬語を適切に使った場合に生まれてくる効果です。使い方を誤ると、逆効果になります。

## 二 使い過ぎると慥無礼になる

尊敬語動詞「おっしゃる」に尊敬語助動詞「れる・られる」を重ねた「おっしゃられる」や、「おくになる」に「れる・られる」を重ねた「お持ちになられる」などの二重尊敬を耳にします。

「お渡しします」と言え方がいいところを「お渡しいたします」「お渡しさせていただきます」という二重謙譲も聞かれます。

敬語はたくさん使えばいいというものではありません。使い過ぎると、慥無礼になり、気持ちや意図が伝わらなかつたりします。

## 三 尊敬語と謙譲語の使い分けを誤ると誤解を生じる

国立国語研究所に寄せられた言葉の質問の一例をあげます。買い物をして、店員から「重

い物ですが、お持ちしますか」と言われたので、駐車場まで運んでもらえると喜んでいたら、品物は自分で持ち帰るようにレジで渡され、戸惑ってしまいました。「お持ちしますか」は、店員が持つて行くことを言うのではないのですか？

この場面で「お持ちしますか」と尋ねられたら、店員が持つて行くことと受け取るのが適切な理解です。「おくする」は謙譲語の形式だからです。店員がこの場面で「(お客さんが)持つて行くのか」と尋ねるのであれば、尊敬語の形式「おくになる」を使って「お持ちになりますか」と言うのが適切です。

## 四 敬語を効果的に使うには

敬語は必要最小限に使うと、内容が簡潔明瞭に伝わります。敬語を効果的に使うには、まず、伝えたい内容を敬語抜きの記事にしてみ、他者の側について言う部分は尊敬語に、自分の側について言う部分は謙譲語に置き換えていきます。内容が「受付で渡した書類を持つて窓口に来てくれ」なら、「受付でお渡しした書類を持つて窓口にお越しください」と、敬語二つですっきり言えます。文末の尊敬語は必要ですが、文中の「持つて」は尊敬語「お持ちになつて」に置き換えなくてもかまいません。

(研究開発部門 上席研究員 吉岡泰夫)

## 方言の文法いろいろ——終助詞——

「方言らしさ」を感じさせる表現の一つに、文末で用いられる終助詞（文末助詞）があります。共通語には「よ」（例：おいしいよ）、「ね」（例：暑いね）、「さ」（例：行くなってさ）、「ぞ」（例：やるぞ）などの終助詞がありますが、方言の終助詞はより多彩です。以下では、私の生まれ故郷である富山県南砺市井波地区（旧東砺波郡井波町）の方言で用いられる終助詞について紹介します。

まず紹介するのは、同じ意味を表す終助詞が共通語にもある例です。

①「写真を撮るときに、動かないよう相手に念を押す」

動クナヤ↑。（動くなよ↑）

（↑：文末で上昇）

②「写真を撮ろうとしたところ、相手が動いてしまった」

オイ、動クナマ↓。（動くなよ↓）

（↓：文末で上昇しない）

共通語では、相手に念押ししながら指示をする場合は「命令形十よ↑」が用いられます。また、自分の意向に反する動作を行った相手に不満の気持ちを込めて指示する場合は、「命令形十よ↓」が用いられます。「よ」のイント

ネーションで意味が変わるわけですが、井波方言では、このような意味の違いは、「ヤ」と「マ」という異なる終助詞によって表されます。次に紹介するのは、同じ意味を表す終助詞が共通語にない例です。

③「さっきまでいた井上がいないことに気づいて」

アレ、井上サン、オランゼ↑。

（あれ、井上さんがいないぞ↑）

④「ふだんネクタイをしない人がネクタイをしているのを見て」

アレ、ネクタイシトルゼ↑。

（あれ、ネクタイをしているじゃないか↑）

「ゼ」が表すのは、予想外の事態に接してとまどっている気持ちです。③の場合は「いると思っていた人がいない」、④の場合は「ふだんネクタイをしない人がネクタイをしている」という意外な事態に接して「どういうこと？」ととまどっている気持ちだが、「ゼ」で表されます。共通語では複数の表現を使い分けますが、井波方言では「ゼ」一つですむわけです。

最後にあげるのは、同じ形の終助詞でも、使い方が共通語とは微妙に異なる例です。

⑤「自分のためにわざわざ重い荷物を運んで

きてくれた相手に」

アンタ、重カッターネ↓。

⑤は「相手に重い思いをさせて申し訳なかったね」という気持ちの文です。共通語では、自分も重い荷物を運んだ場合は「重かったね」と言えますが、⑤のように、荷物を持たせた側の方が相手の苦勞をねぎらうのに「重かったね」と言うことはありません。その場合は、「重かったらう」と言います。しかし、井波方言では、荷物を持たせた側は「重カッターロー」とも「重カッターネ」とも言えます。後者の方が「申し訳なかったね」という気持ちが強くなります。

共通語でも、幼児の気持ちをなだめる場合は、次の⑥のように「ね」を用いることがあります。

⑥「何かの拍子でひじが子どもの頭にぶつかって、子どもが泣き出した」

あ、痛かったね↓。ごめんね。

井波方言の⑤もこれに近い言い方ですが、大人に対しても使えるところが、共通語と一味違うところでは。

方言の終助詞の世界はとても多彩です。みなさんの地域で用いられている終助詞の使い方を少し注意して観察してみると、いろいろなことが発見できると思います。

（日本語教育部門第一領域長 井上 優）

# 読み手に直接、語りかけてもいいのですか？

中国の人が日本語で書いた文章を読んでいると、以下のような「読み手に直接語りかける表現」に出会うことがしばしばあります。

もちろん、「たばこは万病のもと」ではありませんから（私はそうと思いますけど）、たばこを吸う人にきびしすぎないようにして下さいよ。

中国語では、例えば新聞の社説のような硬い文章においても、こうした「語りかけ表現」が使われるのは珍しいことではないようです。

一方日本人の書いた文章には、手紙など特定のの人に宛てたものを除けば、「語りかけ表現」が現れることはそう多くはありません。先ほどの文章を複数の日本人に添削してもらったところ、末尾部分は多くの人が、例えば「きびしすぎないようにしてほしい」のような、「語りかけ」でない形に訂正していました。文章での「語りかけ」は、できれば避けるべきだと考えている人が多いようです。

しかし、改めて考えてみましょう。日本人が文章で「語りかけ表現」をあまり使わないのは、いったいなぜなのでしょう。自分の意見

を訴えていく、という目的の文章であれば、ひとりひとりの読み手に対し直接語りかけるという表現方法も、あつていいのではないか、その方が、訴えの力は強くなるのではないか——もし、日本語の学生が面と向かつてそのように問うてきたとしたら、あなたならどう答えますか（おや、私も「語りかけ表現」を使ってみました）。

この問いに対してはいろんな回答があり得ると思いますが、とりあえず私なら以下のように答えます。「きびしすぎないようにして下さい」と語りかけることは、読み手を『たばこを吸う人に対し、きびしい考えを持っている人だ』と規定してしまうことになる。実際にはいろいろな読み手がいるだろうから、読み手を一方的に規定してしまうような表現は、私としては避けたいと思っている——。

ですから、文章中の「語りかけ表現」が、常におかしいわけではありません。先ほど私自身も「語りかけ表現」を使いました。文章の読み手に対し、文章読解における何らかの方向性を提示するような「語りかけ」であれば、読み手がどういう人であるかを一方的に規定す

ることにはならないので、あまり強い違和感はないのだろうと思われれます。

特定の相手を想定して、その相手に直接語りかける、というやり方は、訴えかけの力は強い一方、想定された語りかけの対象からやられる人々からは、違和感を持たれたり反発を買ったりする危険性もあります。もちろんその危険性を知った上で、あえてそうした表現法を取る、という選択肢も否定はできません。どういふ訴えかけのやり方を取るのがよいか——それは一概に言えることなく、訴えかけの内容や、実際にどういふ読み手が予想できるのか、ということを考え合わせた上で判断すべきことなのでしょう。

われわれは、「ふだん自分は使わない」という表現に出会うと、つい違和感を持つてしまいがちです。場合によってはそれが不快感につながってしまうこともあるかもしれません。そのようなとき、「そんな表現はおかしい」と否定してしまう前に、「なぜ自分はその表現をおかしいと感じるのだろうか」「この人は、どうしてこういう表現をしたのだろうか」と考えてみることは、非常に重要なことだと思います。違和感の理由を考えてみる、ということとは、ことばについて、また人とのよりよい付きあい方について、考えを深めるための絶好の手段になるからです。

（日本語教育部門主任研究員 宇佐美洋）

# 方言世界の名前と分類

言語学には、言語は人間が世界を見る、その見方を規定しているという説があります。ものの名前は、それがどのように分類されているのかということに関係しています。

「みぞれ」は、雨なのか、雪なのかと問われると、東京出身の私などは困ってしまいます。しかし、言語学者の柴田武氏によると、北海道方言では「アメユキ」とか「アマユキ」（雨雪）といって雪の一種であつて、北海道でみぞれでも傘をささないのは、それが雪だからだそうです。反対に、鹿児島県日置郡では「ユツジャメ（雪雨）」といって、どちらかと言えば雨に分類され、実際、雨に変わりやすく、傘もさすのだそうです。

かつて、東京に近い埼玉県南部地域で行われた方言調査で、セミの呼び名の分析を担当した時のことです。

調査の初年度、調査項目にあつたのは、アブラゼミ、ニーニーゼミ、ヒグラシ、ツクツクホーシの四種類でした。アブラゼミは大きく、ほかの三種類は小ぶりのセミです。それぞれの

場所で何と呼んでいるのかを地図上に記して

セミの方言地図を何枚も作りました。すると、様々な名称がある中で、アブラゼミには「オーゼンミ」や「オヤゼンミ」（ゼンミはセミのこと）など大きなセミを意味する名称の分布があり、ニーニーゼミには小さなセミを意味する「コゼンミ」がありました。しかし、ヒグラシやツクツクホーシは様々な呼び名はあつても、なぜかどこでも小さなセミとは呼ばれてはいないのです。

四種類のセミの中で、アブラゼミとニーニーゼミだけにこのような大小の対となる名称の分布が見られるのは、なぜでしょうか。

そこで、二年目からは調査項目にミンミンゼミ（よくいる大きなセミ）を加え、さらにそれぞれのセミの鳴き声を表現する擬声語も調査することにしました。

その結果を見ると、ミンミンゼミの呼び名はほとんどの場所で「ミンミン」類でした。ミンミンゼミも大きなセミなのに、大きなセミという名称が分布しているのは、やはり、アブラ

ゼミなのです。

鳴き声の擬声語の方はというと、アブラゼミにはジージー類が広く分布し、ほかにジャガジャガ類などがあり、ニーニーゼミにはジージー類、チーチー類が分布しています。そこで、呼び名と鳴き声（擬声語）を一緒によく見てみると、アブラゼミは「オヤゼンミ」、ニーニーゼミは「コゼンミ」という大小の対で呼ばれている地域では、擬声語は共に「ジージー」となっていました。一方、他の三種類の鳴き声は全く別の独特な擬声語です。このように見ると、アブラゼミとニーニーゼミは同じ鳴き声の大きなセミと小さなセミとして自然なままとまりになっている地域があるのだということに気づきます。

この「オヤゼンミ」と「コゼンミ」の対というまとまり自体に名称（総称）がある訳ではありません。しかし、これらの呼び名が明らかに対をなしているだけでなく、呼び名と鳴き声を示す地図の上の分布からも、これらの関係が読み取れるのです。

このようにして、方言によるひとつの分類が見えてきました。

ところで、西欧人には虫の音は雑音にしか聞こえないという説があります。そのようなところでは、虫の音がかかわるような分類は生まれてこないかもしれません。

（情報資料部門長 熊谷康雄）

# 名称の変化あれこれ

「ハンサム」はいずれこへ？

ここ数年、「イケメン」という言葉に接することが非常に多くなりました。「イケメン議員」「イケメン社長」「イケメン弁護士」……。最初はいわゆる「若者言葉」でしたが、今やすっかり一般化した感があります。おかげで、少し前までへ顔立ちの整った男性への代表的な呼び方だった「ハンサム」は、めっきり出番が減ってしまいました。

呼び方はともあれ、そういう男性は女性とアベックになる機会にも恵まれやすくて……などと言うと、若い人からは「古い！」と笑われかねません。今の（親子・兄弟姉妹などではない）男女の二人連れへの呼び方は、「アベック」ではなく「カップル」なのです。ただしささか「古い」人間である私などは、「アベック」はあくまで（男女の二人連れ）という外見上の状態を表す言葉で、「カップル」は（夫婦・恋人など恋愛関係にある男女）という内面まで踏み込んでいる言葉、という違いがある（つまり、見た目が「アベック」でも必ずしも

「カップル」とは限らない）ようにも思うのですが……。

## 公的機関による新名称

このように、ある事物や概念の名称は時間の流れの中で変っていきます。多くの場合は、我々が気づかないうちに、いつの間にか変っていくものです。しかし中には、公的機関の決定によりある日を境に新しい名称が使われ始める、という例もあります。二〇〇四年後半にはそのような事例がいくつかありました。

一〇月に発生した新潟県中越地震では、多くの箇所で崩れた土砂により川がせき止められました。この現象は当初「天然ダムができた」と報じられていましたが、国土交通省は翌月一二日、「天然」にはいいイメージがあり、被災地の惨状にそぐわない」として、今後は「河道閉塞」という名称を使うと発表したのです。

またこの年は「オレオレ詐欺」が大きな社会問題になりましたが、手口がどんどん多様化していき名称と実態が合わなくなったため、

一二月九日に、警察庁はこの種の犯罪の統一名称として「振り込め詐欺」を使うことを決めました。さらに同月二四日、厚生労働省は、「痴呆」という言葉が侮蔑的でおかつ実態を正確に表していない、という意見を踏まえて、同日付で行政用語を「認知症」に変更すると発表しました。

## 同じ公募でも……

現在使われている「オフィス・レディー」略して「OL」は、一九六三年に生まれた言葉です。それ以前は「ビジネス・ガール」略して「BG」と言っていました。しかし英語ではよからぬ意味があるというので、東京オリンピックを翌年に控えたこの年の九月、NHKはこの語を放送で使わないとしました。そこである女性雑誌が新しい呼び方について読者などから案を募り、最終的に「OL」が選ばれたのです。この結果が掲載された号の発行日である一月二五日は、一九九四年に「OLの日」に制定されました。

「OL」と同じく一般公募を経て決まったものの、定着しなかったのが「E電」です。一九八七年四月の国鉄分割民営化に際し、それまでの「国電」に代わる名称としてJR東日本が決定しましたが、ご存じの通り、国民には受け入れられませんでした。

（情報資料部門第一領域主任研究員 新野直哉）

# 文章を書く機械

つぎの歌の作者を a b c の中から選んでください。

丘の上 ころがしたままの日よけと椅子  
ひどく冷たいフィズの泡の中へエスケイプ  
ふりむけば しばらくは地球も止まり

二人でサクラを見ていたわ

Kobe giri そばにいたいから

Kobe giri いちばん愛するため

グラス空けましょう

へ a 中島みゆき b 桑田佳祐 c 松任谷由実

c を選ばれたと思いますが、実はこの歌はパソコンが作りました。にもかかわらず、ユーミンの文体的特徴がよく表れているのは、彼女の歌で使われたことのある単語をある一定の規則に従って並べたからです。その規則とは、当該の単語の次に使われた単語のグループのなかから一つの単語をデタラメに選ぶということだけです。それを歌詞の最初から単語ずつずらしながら繰り返ししていくと右のような疑似ユーミンソングが合成されるのです。

## 分析から合成へ

この実験は、一見、単なることは遊びのように見えますが、実は言語学を根底から変えるほどの可能性をもっています。言語学に關わらず、すべての近代科学の研究方法は「分析 (analysis)」だけでした。分析とは、研究対象をできるだけ細かい要素に分解して、その個々の要素を調べることにより、研究対象の性質や構造を明らかにする方法で、デカルトが『方法序説』(一六三七)で提唱しました。しかし、この方法だけでは限界があるということが三〇年ほど前からいろいろな分野で指摘されるようになりました。

たとえば言語行動では、文章や会話の「理解行動」の研究に分析が活用されてきました。が、これまでの言語学ではここで研究が終わっていたのです。しかし、言語行動には「表現行動」というもう一つの重要な側面があり、そのための新しい研究方法として「合成 (synthesis)」が注目されています。

合成というのは、研究対象の要素をある規則によって混ぜ合わせたり、組み合わせたりすることによって、研究対象を再構成する方法のことです。コミュニケーションは理解行動と表現行動によって初めて成り立ちますので、理解行動だけを研究していたのでは、永遠にその本質を解明できないということになります。

## 単純な規則から生まれる複雑な現象

その合成の規則は案外単純なものでよく、その単純な規則によって複雑な自然現象や社会現象、さらには生物の行動も再現できることがわかってきました。そのように複雑な現象の背後にある単純な規則を解明するのが「複雑系の科学」です。

実は言語行動も複雑系の現象の一つにほかならず、我々が文章を書いたり、会話をしたりという行動も単純な規則で成り立っている可能性が高いのです。冒頭で紹介した疑似ユーミンソングの合成原理は、米国の応用数学者・シャノンの情報理論にもとづいています。が、複雑系の規則の一つと目されています。現在は韻文の合成実験が主流ですが、もうすでに散文合成の方法も考えられています。

いまのロボットと同様に、文章を書く機械もSFの世界だけの話ではなくなってきているのです。

(情報資料部門第一領域長 伊藤雅光)